

平成 21 年 4 月 1 日講演要旨

福井ワシントンホテル3F

羽二重王国誕生秘話 ～ 福井に羽二重織を教授した技術者 ～

明治以来福井は「モノづくり」で生きてきたが、それを支えたのが織物である。羽二重王国→人絹王国→合織王国として1980年代まで100年間世界市場に名を馳せた。

しかし、原点ともいうべき羽二重を織る技術はもともと福井には存在せず、当時織物産地で著名であった桐生から技術導入したものであった。

明治6年、旧藩士由利公正は欧米視察から多種の絹布見本を持ち帰り、福井の機業家に欧米絹業の発展と状況を伝え一層の奮起を促し、これが織物の改良、発展の素地となった。

明治10年代後半に入ると、桐生・足利から羽二重が米国へ輸出されはじめ、羽二重の需要が高まるなか、福井でも羽二重への関心が高まった。

しかし、当時の福井には羽二重製織の技術は無く、業界では新技術導入の機運が起き、技術教師の選定と招聘を当時の織物組合副組長村野文次郎に依頼する。

明治18年11月、村野は桐生に出向き著名な機業家森山芳平と相談し、同工場の技術者高力直寛の招聘が決まる。20年3月に高力は来福し3週間にわたる羽二重講習会が行われ、製織技術を福井に教授した。これが「羽二重王国福井」誕生のきっかけとなった。しかしここに至るまでには福井、西陣、桐生、足利を繋ぐ「糸」が欠かせないものであったが、この経過の詳細はこれまで十分に明らかにされていない。

福井に羽二重を教授した高力は、後に「高力伝記を書くことは日本の機業史を書くに等しい」とまでいわれるほど斯界の大家として教育界、業界で活躍する。高力にとっても福井の羽二重講習の成功がその後の活躍へと繋がったのである。